

メッセージ「出会いは神様からの贈り物」

牛田 匡 牧師

聖書 ヨハネによる福音書 4章5-26節

今年も梅雨の季節になったものの、雨がそれ程降らないなあと思っていた所、九州では昨日から記録的な大雨が降っているということで、大きな被害が出ないか心配です。ここ数年、毎年のように豪雨による大規模な被害が各地で出ていますが、今年は新型コロナの感染症もありますから、これ以上、大雨による被害が出ないように、祈るばかりです。

今日の聖書のお話は、「生ける水」という言葉が印象的な「水」にまつわる物語でした。「生きている水」「命の水」とも訳せるこの言葉は、くぼみなどに溜まって^{よど}溜んでいる「溜まり水」「死んでいる水」に対する「生きている水」として、いわゆる「湧き水」や「流れる水」を意味する言葉です。ですが、単に流れていて清く澄んでいるというだけではなく、やはり生き物が生きていくのに不可欠な水という意味で、「生ける水」「命の水」だったのでしょう。聖書が記された中東パレスチナの地というのは、2000年前も3000年前も、そして現代も人々が暮らしている町や村々の間には荒れ野が拡がり、それこそ川や泉、井戸などが生命線でした。水の豊かな日本でも、水利権を巡る争いがあちこちであるように、ヘブライ語聖書の中の『創世記』には井戸を巡る争いが何千年前からあったということが記されています。

また聖書の最後に記されている『ヨハネの黙示録』の中にも、この「生ける水」「命の水」という表現が出てきます。それは新しい天地、天国の描写として、描かれています。砂漠に近いような荒れ野の環境において「もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない」という言葉とセットになって記されています。つまり、当時の人々にとっては、飢えも乾きも日々にごくごく身近にある出来事であり、ギラギラと太陽に照りつけられたり、砂漠で^{しゃくねつ}灼熱の熱風に襲われたりすることも、しばしば体験されることだったからこそ、新しい天地では、神様のお守りの中で、そのような辛いこともなく、飢えることも乾くこともないはずだ、という願いが現れていたのだと理解する事ができます。

今回の物語はイエス様が、南のユダヤ地方から北のガリラヤ地方に向かわれていた旅の途上で、シカルというサマリアの町の井戸のほとりで、水を求めたとい

うお話ですが、この物語の背景には、水を巡るそのような時代背景、生活環境がありました。それからもう一つ、このお話を読む上で大切なのが、このサマリアという地方についてです。サマリア地方は紀元前 8 世紀にアッシリア帝国の軍隊によって侵攻され、異民族との混血が進み、宗教的にもユダヤ教とは異なる信仰を持ち、神殿もエルサレム神殿ではなく、ゲリジム山という場所に独自の神殿を持っていました。そのために古代イスラエル民族からすると、サマリア人は近くにいるけれども、避けるべき異邦人・異教徒であり、自分たちより下にいる存在として、忌み嫌い、蔑^{さげす}んでいた人たちでした。

エルサレムの都があったユダヤ地方からすると、イエス様がいたナザレの村やガリラヤ地方も、辺境の地であり、軽んじられていましたが、サマリア人は、ガリラヤ人よりも更に下に見られていたわけです。そして南のユダヤ地方から、北のガリラヤ地方に行くためには、その間に位置するサマリア地方を通るのが近道ですが、サマリア地方を通り抜けるのは汚らわしいことだとして、わざわざヨルダン川を渡って東側に出てから北上したと考えられています。

にも拘^{かか}わらず、今日の箇所では 4 節で「(イエス様は) サマリアを通らねばならなかった」と言って、サマリアに行かれました。そしてそこでイエス様は一人の女性に「水を飲ませてください」と声を掛けられました。するとその女性は驚いて、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女の私に、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言いました。なぜなら「ユダヤ人はサマリア人とは交際していなかったからである」と福音書の記者は、説明を加えています。しかし、この 9 節後半の説明書きですが、原文では、この言葉もサマリアの女性の発言として読むことも可能です。そのように考えると、この女性の言葉は次のようになります。「あなたはユダヤ人であるのに、どうしてサマリアの女である私に、飲ませてくれなどと頼むのですか。ユダヤ人はサマリア人とはつきあわないじゃないですか」。このように読むと、この女性の印象が大きく変わるのではないのでしょうか。まるで「普段は自分たちを下に見て差別しているのに、水が欲しいだの食料が欲しいだの、自分たちに都合の良いように、私たちを利用しようとするなんてことは、止めてほしい」と言うかのようです。

地理的に見ると、ユダヤからガリラヤに行くのに、サマリアを通らないように、ヨルダン川を渡ってから北上するという事は可能ですが、明らかに遠回りです。ですから、その地に住む人々のことを忌^き避^ひし、蔑^{さげす}みながら、ユダヤ人たちがサマリア地方を通り抜けたということも、実際にはしばしばあったことでしょうし、

歩いてサマリアを通り抜けるためには、途中で一泊はしなければならない距離でしたので、宿屋などでサマリア人のお世話にもなっていたことでしょう。にも拘らず、ユダヤ人たちがその土地の人々を軽蔑し、下に見ていたとしたら、どうでしょうか。そのようなことを考えながら、私が思い出したのは、アメリカにおけるアフリカにルーツを持つ黒人たちであり、日本における朝鮮にルーツを持った人たちでした。身近にいながら、蔑み、距離をとる。時に直接関わりを持った際にも、相手をあしらうように扱う……。そのようにされ続けた側の思いは、どのようなものだったのでしょうか。

つい 65 年前の話ですが、アメリカでは公共交通機関においても、人種隔離政策がまかり通っていました。バスの席に黒人が座っていても、後から白人が乗ってきたら、席を譲るのが当たり前とされていました。そのような風潮の中で、後から乗って来た白人に席を譲るように運転手から指示されたにも拘らず、「同じ乗車賃を支払っている自分にも席に座る権利がある」と言って、席を譲る事を拒否して、逮捕されたローザ・パークスさんの事を思い出します。この「モンゴメリー・バス・ボイコット事件」はアメリカの公民権運動のきっかけの一つとなつたとされていますが、イエス様に対して「あなたはユダヤ人であるのに、どうしてサマリアの女である私に、飲ませてくれなどと頼むのですか。ユダヤ人はサマリア人とはつきあわないじゃないですか」と言ったこの女性もまた、この言葉を自分の尊厳をかけて、勇気を出して言ったのではないかと想像します。

しかし、イエス様はその言葉には、良いとも悪いとも、直接は答えずに、ちぐはぐな答えをされました。10 節ですが、「あなたは神様からの賜物、贈り物を知っていますか。『水を飲ませてくれ』と言ったのが誰だか知っていますか」……。もちろん、知っているわけがありませんが、「もし知っていたら、あなたの方から『水を飲ませてください』と願い出て、『生ける水』『命の水』をもらったはずだ」……。この後も、二人のちぐはぐな噛み合わない問答は続きます。具体的な水、井戸の湧き水のことを言う女性と、抽象的な「命の水」の話をするイエス様……。イエス様は言われます。「私が与える水を飲む者は決して渴かない。私が与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る」。これはどういう意味でしょうか。さらに後半では、ユダヤ教のエルサレム神殿でもなく、サマリアのゲリジム山でもなく、真実の霊をもって神を礼拝する時が、今すでに、ここに来ている、という話をされています。ユダヤ人が正しいか、サマリア人が正しいか、どちらが正しいかではない。神殿も宗派も民族も、それらの違いを越

えて、父なる神とつながる時が来ている、ということです。

渴いている人には水が必要です。虐げられている人、差別されている人には解放が必要です。しかし、暴力に暴力で抵抗してはいけないように、差別されていた人たちが逆に差別する側になってもいけません。これまで差別する側にいた人たちもまた、その立場から解放される必要があります。「永遠の命をもたらす水、自らの内で泉となって湧き続け、それを飲めば決して渴くことがない命の水」とは、そのような右と左、差別と被差別、支配と被支配という対立それ自体を乗り越えて行くものなのかもしれません。先月からアメリカ各地で起こっている「Black Lives Matter (黒人の命も大切)」という抗議運動も、穏健なデモが行われている所もあれば、暴動が起きて、軍隊が出動して鎮圧された所もあるようです。これまでの差別の歴史を振り返る時、やんわりと「差別は良くない」「みんな大切」と言うだけでは、全然足りない、却って現実に蓋をして見えなくしてしまうだけだ、ということも分かります。しかし、暴力や武力によって真の平和が築かれる事はない、ということもまた、歴史が証明していることです。

先日 24 日は沖縄慰霊の日でした。75 年前に約 20 万人という甚大な犠牲者を出した沖縄戦が終結した日を記念する日ですが、今年はコロナの影響で、例年よりも規模を縮小して、場所も変更して行われたそうです。世界中では今も日々戦争の準備がなされています。日本でもそうです。過去の記憶と、現代とが切り離されてしまっていないでしょうか。今この瞬間にも、この世界を何度も破壊できるだけの核兵器が世界中に何千個とあります。そのような狂った世界の中で、真の平和はどこにあり得るのでしょうか。

右と左、立場の違いや様々な障壁を乗り越えて、真の平和を実現するもの、イエス・キリストの福音は、どこにあるのでしょうか。イエス様は勇気を出して、抵抗の声を上げたサマリアの女性に言いました。「あなたは神様からの賜物、贈り物を知っていますか。『水を飲ませてくれ』と言ったのが誰だか知っていますか」。この質問の答えは、神が人間となったイエス・キリストでした。真の平和、全ての人を活かす命の水、イエス様は最も低く小さくされた所におられます。ユダヤから切り捨てられていたサマリアの、差別されていた女性との出会いの中におられました。「出会いは神様からの贈り物」……。私たちはどこでイエス様と出会うのでしょうか。そしてまた、どのようにして命の水、真の平和を得るのでしょうか。神様から与えられる出会いの一つ一つを大切にしながら、私たちは今日もまたイエス様と出会う歩みへと導かれて行きます。